

ヤコフ・フリエール モスクワ音楽院教授の 音楽科教育思想に関する研究

—— 弟子であるピアニスト高山三智子の見解を手掛かりとして ——

藤田文子*

(2023年10月31日受理)

Yakov Flier, Professor of the Moscow Conservatory A Study on Educational Thought in Music Studies
:Taking as a Clue the Views of his Pupil, Pianist Michiko Takayama

Ayako FUJITA

キーワード:ヤコフ・フリエール, 高山三智子, 鴨志田万名美, 音楽科教育, 器楽指導(ピアノ)

本論文は、先行研究の捉えなおしを基盤に、筆者の器楽(鍵盤楽器)指導研究をさらに進めることを目的とする。昨年度の全学教職センター紀要で若干触れた、高山三智子の指導法に注目し、筆者の一貫した研究テーマである器楽指導法、その中でも、鍵盤楽器の学習、特にピアノの学習、指導の本質について研究を深めることとした。高山とその姪である鴨志田万名美を招聘講師として展開した、授業を端緒に、高山、鴨志田らの実存に迫る、ヤコフ・フリエールモスクワ音楽院教授の音楽科教育思想について、筆者の高山、鴨志田らへのインタビューを通して検討した。その結果、高山は、フリエール教授の才能を主軸とした音楽科教育の理解と継承を含むものの、日本という国柄や、時代という事、地域性、教育的意義を十分踏まえて展開しており、高山ならではのオリジナリティーを持っていたことがわかった。また、姪の鴨志田においても、フリエール、さらには、高山の音楽科教育思想の理解と継承を含むものの、「生徒の視点に立つ」、オリジナリティーに富む、独自の視点での音楽科教育思想が展開していることがわかった。また、高山、鴨志田、筆者共に、自分の子にかける、望んでやまない、普遍につながる、利害を超えた、教育の原点に繋がる、母、ご家族の愛があることがわかった。

はじめに

現行の小学校学習指導要領に準拠の、本学で、筆者が授業で使用している教科書¹⁾、第2部 実践編 第3章 器楽の学習と指導 2 | 各楽器の奏法と指導法 ③鍵盤楽器の項目で、中地は、授業で取

*茨城大学教育学部

り上げる、「鍵盤ハーモニカ、オルガン、アコーディオン、ピアノ、電子キーボードなど²⁾」といった鍵盤楽器を列挙した後、「鍵盤は、オクターヴや半音・全音など、音階の基礎的構成を視覚的に把握できるため、理論の学習にも活用できる³⁾」として、その重要性を指摘している。

実際、本学の必修の授業である「初等音楽科教育法」において、鍵盤楽器の「弾き歌い⁴⁾」が必修になっていることでも、教員養成における重要性が理解できよう。

筆者は、本学に着任以降、初心者であるか、既修者であるかを問わず、その教育的意義ゆえに、器楽指導法、その中でも、鍵盤楽器の学習、特にピアノの学習、指導の本質について、様々に模索してきた。

そういった経緯の中、昨年は7月22日(金曜日)、筆者の授業である「初等音楽科教育法」の中で、ヤコフ・フリエール モスクワ音楽院教授⁵⁾ (以下フリエール教授と略記)の薫陶を受けた、ピアニストの高山三智子(以下高山と略記)⁶⁾、同じく高山の姪で、ピアニストの鴨志田万名美(以下鴨志田と略記)⁷⁾を90分、一コマという限られた時間であったが、招聘講師として招き、音楽科の授業であっても、「音楽を教える」という音楽科教育の原点に立ちかえり、その指導法の本質に抵触する授業を展開していただいた。

その結果、学生のヤコフ・フリエールの音楽についての興味、音楽科における、生徒の視点に立つ指導法への関心、音楽教育史的観点の重要性への覚醒、音楽についての哲学的理解(音楽とは何かについて考えること)、留学についての展望への興味などについて、大きな教育効果を得た⁸⁾。

本研究はそういった経緯の延長上にあるものである。

なお、フリエール教授は、コンクールで活躍する姿の他に、戦後の腕の故障、そしてその回復への努力を見せていた。そしてさらに、フリエール教授は、「実務的で効果的な指導が極めて巧みな先生だったのだろう」とされており、世界的に有名な教員としての存在価値や、その人気の高さについて伝えられている⁹⁾。

また、筆者は、自分自身の歴史研究の要として、実証的な立場の重要性を勘案し、過去の歴史の遺産を、今しか残しえない、主に関係者の証言等に従って残すことも、ライフワークとしている。

この意味で、本論は、音楽教育史学会のシンポジストとして発表した立場も踏襲するものである¹⁰⁾。

本論では、はじめに、に続き、フリエール教授の音楽科教育思想——弟子であるピアニスト高山の見解を手掛かりとして——、まとめにかえて、といった順番で本論文を展開することとする。

フリエール教授の音楽科教育思想——弟子であるピアニスト高山の見解を手掛かりとして——

次に、筆者の高山へのインタビューを中心に、以下、フリエール教授の音楽科教育思想——弟子であるピアニスト高山の見解を手掛かりとして——という形で、フリエールの音楽科教育思想を述べることにしたい。

なお、諸般の事情から、主に、筆者から高山への電話等による、直接の聴取、メール等による、高山本人の了承を前提とした、ひいては、高山への鴨志田を通じたインタビューへの回答となった

ことをご理解いただきたい。また、鴨志田と高山の見解に齟齬があった場合には、別に、鴨志田自身の見解を加筆していただくこととした。

以下、(1) フリエール教授の音楽に対する考え方について、(2) フリエール教授が音楽科教育において大切にしていたものについて、(3) フリエール教授の音楽科教育思想について、順次、高山、時に応じて鴨志田へのインタビュー記録を示すこととする。なお、高山、鴨志田のインタビューに関しては、ニュアンスを伝えるため、出来る限り、聴取したままを旨とした。

(1) フリエール教授の音楽に対する考え方について

藤田：フリエール教授の音楽に対する考え方についてお伺いします。多くの人間において、彼のピアニスト、モスクワ音楽院教授という人間としての実存につきましては、様々な困難を乗り越え、素晴らしい業績や、教育歴、教授歴を残された方という認識は、動かないところと思っています。一方、彼の音楽科教育者としての普遍的な価値について思いを馳せる時、どのようなものであったのか、フリエール教授の音楽に対する考え方から、お伺いできますでしょうか？

高山：フリエール教授に関しましては、彼自身、音楽の類まれな才能がおありであったことが、音楽のすべてであったように思います。

また、この才能に関しましては、サッカーをやろうとしていたにもかかわらず、その才能ゆえに、サッカーをやめさせられて、モスクワ音楽院に入れられたという表現を、彼自身がとられていたことでもわかります。

ともかく、生まれつきの才能を重視していらっしゃいました。

フリエール教授は、20代に、手を怪我し、モスクワ音楽院の教師におなりになった後でも、その才能は変わらず、生徒をお教える場合でも、生まれつき、生徒の持っている才能の質に注目していらっしゃいました。

フリエール教授によれば、教えようとしている、生徒の持っている音楽の色が、自分のものと一致していることが、大切でありました。

それは、人は生まれつき、自分の音楽の特徴を持っているという、フリエール教授の考え方によるものです。音楽の色とは、一人一人の持つ、独自の音楽の節回しとでも言ってよいもので、フリエール教授と生徒は、原則として、共通するもの、同じでなくてはいけないものでした。いわば、共通コードをお互いに持っている、といってもよいものでした。

一方、私自身、フリエール教授のいらっしゃるモスクワ音楽院に留学する端緒となったのは、母^田の存在が大きく影響しています。母は、自分、他人、どの子どもであっても、分け隔てなく、才能を伸ばすということに対して、非常に情熱を燃やした人でありました。

御多分に漏れず、フリエール教授のことに関しても、母は、フリエール教授に私のピアノを聞いていただくきっかけを作ってくれました。

弟子にさせていただいたのも、フリエール教授に私の音楽をお聞きいただいて、こういった意味で、お気に召されたということにあると思います。つまり、フリエール教授と私が、音楽的に言えば、生まれつき、お互いに、共通コードを持っていたということがわかったということになると思います。

また、フリエール教授自身は、「気持ちよく暮らしたい」というコンセプトが第一でした。フリエール教授の音楽も、フリエール教授にふさわしく、美しく、きれいな、人をひきつけてやまない、魅力のあるものでした。

フリエール教授の音楽は、豊潤で、明るい、それでいて優しい、優雅な色を持っていましたし、時に、大きな、また、力強いものでもありました。

はじめて、フリエール教授の演奏を実際にお聞きしました時は、大変に感動しました。今まで接したことの無いものでした。

(2) フリエール教授が音楽科教育において大切にしていたものについて

藤田：1. では、フリエール教授の音楽に対する考え方からお伺いいたしました。音楽科の授業であっても、「音楽を教える」という原点に立ち返って見た場合、1. でお伺いした音楽を、フリエール教授がどのように教えるのか、すなわちフリエール教授が音楽科教育においてどのようなものを大切であると考えていたとお考えでしょうか？

高山：フリエール教授は、非常にお忙しい方であった、ということもあり、あくまで才能がその中心にありました。

生まれつきの、1. で言った音楽における節回しが合わない場合、どうしても合わないと感じた生徒には、教えることをやめることもあったようです。

先生と生徒に、音楽の共通コードがなければならぬようでした。

人によりましては、好みととらえられることもあるかもしれません。

(3) フリエール教授の音楽科教育思想について

藤田：総括して考えた場合、フリエール教授は音楽科教育思想についてどのようにお考えでしたのでしょうか？また、こういった、フリエール教授の音楽に対する考え、フリエール教授の音楽科教育思想の、高山先生への影響についてお教えいただけませんか？

高山：フリエール教授はあくまで、才能を中心とした考え方でした。

藤田：そうしますと、高山先生は、そういったフリエール教授の考え方に従って、才能を中心に生徒を教えていらしたのでしょうか？

高山：そういうことはありません。

私は、生徒が、先生の音楽に触れて感動するといった、衝撃を通して、つまりそういったエネルギーを通して、生徒が音楽を理解する可能性があるという考え方に立っています。つまり、生徒を見捨てないというのが、私の考え方の中心にあります。

また、教えるといったことに対する責任ということも、私は大切に考えています。

藤田：他に、高山先生の、フリエール教授とは距離がある、と受け取れる考え方はありますか？

高山：それは、生徒を教えるにあたって、いかに親和関係を築くか、という点にあると思います。

たとえ嫌いと思っても、相手に気付かれないこと、また、生徒は出来ないと見捨てないことです。

藤田：そういったことが、高山先生の独自性ということになるのではないのでしょうか。

また、鴨志田先生が、授業でおっしゃった、視点を生徒におく。また、具体的に、生徒の心に注目し、具体例を示しながら、親和関係を築きつつ、授業を展開していくという姿は、ともすれば、学問的

に、偏りがちな、受容的な存在となりにくい教科にあって、新しい世界を開くものになるのではないのでしょうか？

鴨志田: そうあればよいと思います。

まとめにかえて

以上、本論文では、高山、鴨志田に大きな影響を及ぼしてきたと目される、フリエール教授の音楽科教育思想について、高山、鴨志田のインタビューに示された見解をもとに検討することとした。

その結果、フリエール教授の卓越した、才能ゆえか、フリエール教授の才能とは、音楽に関して、先生と生徒が生まれつき同じ共通コードを持つ、といった質のもので、才能を中心としたものであることがわかった。

一方、高山の音楽科教育思想はフリエールの音楽科教育思想の理解と継承を含むものの、日本という国柄や、時代という事、地域性、教育的意義を十分踏まえて展開しており、高山ならではのオリジナリティーを持っていたことがわかった。

また、姪の鴨志田においても、フリエール教授や、高山の音楽科教育思想の理解と継承を含むものの、「生徒の視点に立つ」、オリジナリティーに富む、独自の視点での音楽科教育思想が展開していることがわかった。

そもそも筆者が、フリエール教授の音楽に接することができたのは、私の実母¹²⁾が、高山のピアノの才能に感動したことにある。

私の母もまた、高山先生のお母様には遠く及ばないが、教育に非常な情熱を持っていた人であった。

そもそも、高山先生のお姉さま¹³⁾が、我々の住んでいる下市地区に、音楽を教えにいらっしゃることを、目ざとく聞きつけたのも母であった。母は、自分自身が、音楽を学びたかったにもかかわらず、かなわなかった、そういった境遇の人であった。

また、高山のピアノを聞いた私の母の言葉は以下のとおりである。

「ピアノの中から、いろいろなものが出てくる。素晴らしい音楽だ。この才能を持つ人を先生として、うちの娘にも習わせたい。」

そこからすべてが始まった。

才能の無い私は一向に先生方の影響を受けず、今日に至っている。

しかしながら、良いものはよいとして、感動する心、肯定的に受け入れて、憧れを形成する心を持つことに目を向けようとするのができたのは、私にとって、感謝以外にない。

ともかく、高山、鴨志田の教育的意義に関しての辛抱強さ、柔軟性は特筆に値するであろう。

母ということに関しては、鴨志田の母¹⁴⁾も、内容の差こそあれ、その姿は、高山、筆者の母らに通ずる、教育への深い造詣といったものがあり、筆者の目からすれば、教育にあって、何物にも代え難いものであった。

こういった母ら、さらに言えば、家族の愛に関しては、教育、中でも器楽指導(ピアノ)、特にピアノの教育において、例外はあるかもしれないが、存在を否定することは難しいと言ってもよいの

ではないかと、筆者は考える。

もう一度フリエール教授の音楽に戻ることにしよう。

音楽に関して言えば、機会があれば、皆様に、フリエール教授のショパン作曲、ソナタの2番¹⁵⁾や、同じくショパン作曲 マズルカ集¹⁶⁾など、高山のカバレフスキー作曲、ピアノ・ソナタ第3番へ長調 作品46¹⁷⁾、メットネル作曲、追憶のソナタ イ短調 忘れられた調べ第1集 作品38より¹⁸⁾などを、2人ながらに、お聞きいただきたいと思う。

高山の音楽は(筆者からすれば)、フリエール教授の教えを非常に強く感じることができ、師の弟子に対する慈愛と言ってもよい愛情や、師匠譲りの演奏が極めて視覚的に展開する、ドラマティックな側面を感じることができると言えよう。

高山のヴァイオリンを思わせるリリズムも師匠譲りとすることも可能であろう。

しかしながら私は、その中であって、高山が、彼女なりのやり方で、師匠を止揚(aufheben¹⁹⁾)し、オリジナリティーを得ていることに、フリエール教授の音楽科教育の目的が、極めて効果的な形で遂げられていると感じる者である。

高山、鴨志田両氏、また、音楽を愛するすべての母、ご家族の皆様に、深く感謝いたします。
本当にありがとうございました。

注

- 1)初等科音楽教育研究会編『改訂版 最新 初等科音楽教育 2017年告示「小学校学習指導要領準拠小学校教員養成課程用」(音楽之友社, 2020)。
- 2)本論注1 前掲書 p.72.
- 3)同上。
- 4)楽器を演奏しながら、歌唱をすること。本学では、楽器として、主に鍵盤楽器を用いている。
- 5)「フリエール Yakov Vladimirovich Flier 1912. 10. 21 オレホヴォ・ズーエヴォ～1977. 10. 21 モスクワ ソヴェトのピアノ奏者。モスクワ音楽院および大学院でイグムノフに学ぶ。1935年前ソ連邦のコンクール、翌年ウィーンの国際・ピアノコンクールで第1位を獲得。欧米各地や日本に演奏旅行を行う。リスト、ラフマニノフ、ショパン、チャイコフスキーなどを得意とし、音色の美しさに定評があった。演奏活動のかたわら37年から母校で後進の指導にあたり、シチュエドリアンらを育てた(加藤一郎)(下中弘編集『音楽大事典第5巻』[平凡社, 1982]p.2165.引用)、とある。
- 6)ピアニスト。東京芸術大学附属音楽学校を経て、同大学ピアノ科卒業。1972年モスクワ音楽院にて3年間、ヤコフ・フリエール教授に学ぶ。研究科修了。各地で演奏会を行い、1980年には、ベルリン室内管弦楽団と共演。演奏会多数。前愛知県立芸術大学講師。また、青少年等の育成といった、広く教育に携わる場面、一方で、コンクールなど、専門家を育成する分野でも、審査員、講師、レスナーなどとして、多方面に活躍している(藤田文子「サルコリの音楽科教育思想に関する研究 —丸山洋子・鶴田昭則の証言を基盤として—」『茨城大学教育実践研究』[全学教職セ

ンター]p.141の注26などを参照)。

- 7)ピアニスト。茨城県立水戸第三高等学校音楽科を経て、武蔵野音楽大学ピアノ科卒業。前茨城県立水戸第三高等学校音楽科講師。祖母の高山貞子、叔母である高山三智子に師事後、秋山千賀子、田辺緑、世川岬子の各氏に師事。
- 8) 授業時のアンケート等があるが、今回は、その内容に立ち入った詳細な吟味は、次回以降に譲り、あくまで、フリエール教授の音楽科教育思想に収斂することとする。
- 9)佐藤泰一『ロシア・ピアノの黄金時代シリーズ 3 『ヤコフ・フリエール 2 曲のコンチェルトを弾く』』(日本モニター株式会社ドリームライフ事業部,DLVC 1189)という、フリエール教授のDVDの解説引用、および参照。
- 10)本論文注6 前掲論文、注16、p.140 参照。
- 11)高山 貞子。声楽家。音楽教育者。
- 12) 藤田 みち。
- 13) 長島 美和子。ピアニスト、音楽教育者。
- 14)高山 信子。
- 15) *THE RUSSIAN PIANO TRADITION The Igumnov School Yakov Flier*(Appian Publications & Recordings Ltd, APR 5665).
- 16) *Frédéric Chopin Mazurkas Yakov Flier, piano* (輸入・販売：株式会社 東京エムプラス, MEL CD 10 02093/2).
- 17) 『ロシアの調べ ピアノ曲集 /高山三智子』(ビクター音楽産業株式会社, PRCD-1248)。
- 18)注18 前掲CD 参照。
- 19)ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel 1770-1831 ドイツ観念哲学を完結した近代の体系的形而上学者[下邦彦編集『哲学事典』【平凡社, 1971】 pp.1260, 1261.]参照)の言葉で、対立する両者が、その対立を基に、更なる高みに達すること[筆者付記、前掲書 pp.705, 706.参照]。